

保育における「環境」の二重構造

高田 憲治*、河村 暁**

Dual Structure of “Environment” in Childcare

Kenji TAKADA, Satoru KAWAMURA

1. 「幼児期の教育」及び「保育」へのイメージ

保育新制度の施行に伴い、幼稚園・保育所・こども園各保育施設において、乳幼児期の生活を支えることに関しては「生命の保持」と「情緒の安定」を大前提にしつつ、幼児期の教育に関しては「環境を通して行う」ことが共通の原理として浸透してきている。この、「生命の保持」「情緒の安定」と「環境をとって行う教育」の営みは、区分することができるものではなく、養護と教育は一体的におこなわれていくものである。

一方、保育者養成課程において、その初年次に、入学前までに抱いていた学生個々人の「幼児期の教育」や「保育」に対するイメージを受け止めつつ、幼児期の特性を理解し、「環境を通して行う」教育の在り方を段階的に学ぶ、その導入となる学習機会を提供している。学生が幼児期に自らが受けた「幼児教育」や「保育」の記憶、記憶がそのイメージの背景にあり、そこにメディアで配信される保育風景や、中学・高校時に職場体験等で見学・実習した保育施設での体験が重なり、個人のイメージは形成されている。その個人的体験が、「遊びを通じた総合的な学び」や「幼児一人一人の特性に応じたもの」に近い場合もあれば、スクール形式の「一斉的・画一的な指導」である場合もあり、多様である。繰り返しになるが、その多様なイメージを受け止めつつも、これからの時代に必要とされている幼児期の教育の内容や方法を学んでいく、そのスタートラインでは、多様なイメー

ジを一つの方向性へと導いていく作業・学びが必要になる。

2. 「環境を通して行う教育」について

幼稚園教育要領（以下、要領）、保育所保育指針（以下、指針）、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下、保育要領）の中で、これからの社会を生きる力を育む「環境を通して行う教育」について、「幼稚園教育要領解説」（以後「解説」）第1章総説、第1節人格形成の基礎と培うこと」に、端的に表現されている。

1. 人格形成の基礎を培う

（中略）

幼児一人一人の潜在的な可能性は、日々の生活の中で出会う環境によって開かれ、環境との相互作用を通して具現化されていく。幼児は、環境との相互作用の中で、体験を深め、そのことが幼児の心を揺り動かし、次の活動を引き起こす。そうした体験の連なりが幾筋も生まれ、幼児の将来へとつながっていく。

「解説」では、これ以降たっぷり紙面（P25-44）をとって「環境を通して行う教育」とその計画、保育者の役割について解説している。この部分を初年次の学生と共に丁寧に読みこむことで、先述の「イメージ」を、「環境との相互作用」の「体験の連なり」を「幾筋」も生み出していく営みであること、という「一つの方向性」へと導くことができる。

* 広島女学院ゲーンズ幼稚園 園長

** 広島文化学園大学 学芸学部 子ども学科

3. 保育における「環境」の二重構造

こうして、一つのイメージを共有して、保育内容、保育の指導法についての学びへと進んでいくわけであるが、学生たちはここで、幼児期の教育及び保育に係る「環境」という概念が、二重構造となっていることにより、混乱を覚える場合が少なからずある。「幼児期の教育は環境を通して行う」という、幼児期の教育全体に対して使われる「環境」と、五つの領域のうちの一つである「環境」との、全体でもあり、部分でもあるという二重構造を、どのように整理し、理解すべきか戸惑うのである。

この戸惑いを受け止めつつも、一見すると二重構造にとらえられる「幼児期の教育・保育」と「環境」との関係性を整理し、すっきりとして保育内容及び保育の指導法の学習に進むために、以下の2項目についての説明が必要不可欠である。

- ① 「環境」という概念・用語の理解
- ② 「領域」の意義づけの理解

さらには、「環境を通して行う教育」と意味的に重なるものとして「生活を通して発達」という表現も多用され、「保育」と「環境」、そして「生活」の用語としての理解や、使用される場面や主体となる存在、主語が誰（何）であるかといったことが整理されてはじめて、全体像がつかめていく。

4. 「環境」という概念・用語の理解

要領において、第1章総説第1節「幼稚園教育の基本」において、まずは「物的・空間的環境」を構成することが求められている。

「環境」は、広辞苑によると

- ① めぐり囲む区域。②四囲の外界。周囲の事物。特に、人間または生物をとりまき、それと相互作用を及ぼし合うものとして見た外界。自然的環境と社会的環境とがある。「恵まれた一に育つ。」

となる。①について「surrounding/surroundings」が英訳として近く、②の使用例については「circumstance」が用いられる。しかしながら、「領域・環境」を表す英訳には、一般的に

「environment」が使用されている。weblio英和和英辞書では、「environment」は「社会的・文化的・精神的に影響力を持つような環境」とあり、人格の形成の基礎を培う「相互作用」を重視する観点から、「environment」がふさわしいことが明らかである。解説においては、「物的環境」と「人的環境」は並列で表記され、細部を読み込んでいけば幼児が環境とかかわる「時間」の構成や、「相互作用」によって生じる事象、出来事、物語までもを含む、「モノ・ヒト・コト・トキ」という環境要因が、子どもを育むのであり、その環境を保育者が計画し、環境構成することが重要であると謳われている。

こうした意味での「環境」を、保育のすべての営みの上で俯瞰する時、保育全体にかかる「環境」や、領域の一つである「環境」、また、「物的環境」「人的環境」「環境構成」など、二重構造としてだけでなく、多義的に用いられていることに気づく。実は、「環境」とは、それ単体では具体を伴うものではなく、主体となるものを想定し、はじめて具体的な意味を持つものである。つまり、「幼児期の教育」「保育」を主体・主語とした場合の「環境」、「3歳児」一般を主体とした場合の「環境」、3歳児のA児という特定の子どもを主体とした場合の「環境」とで、その具体は異なる。また、ある保育施設で「環境」を語る際、用いる時、その「施設」にとっての「環境」と、一つの保育室やクラスといった単位を主体とした「環境」、そして「一人の幼児」を主体とした「環境」では、その具体は異なる。さらには、「一人の幼児」でも、その子が過ごしている時間帯や場所、仲間関係やおかれている状況によっても「環境」の具体、つまり「環境要因」は変化している。

「環境を通して行う教育」は、このように、物的、人的、時間的、相互作用（物語）的な要素によって、刻々と具体が変容し、その流れの中に保育者も身を置きながら、幼児にとって適切な環境を試行錯誤していく営みである。「環境を通して行う教育」の主語は、大人・保育者である。

5. 「領域」の意義づけの理解

これに対し、「生活を通して発達」する主語は、

幼児である。要領、指針、保育要領において、幼児が生活を通して発達していく姿を踏まえ、育みたい資質・能力を幼児の生活する姿から捉えたものを「ねらい」としている。また、それを達成するために保育者が幼児の発達の実情を踏まえながら援助・指導し、幼児が身に付けていくことが望まれるものを「内容」としている。そして、このような「ねらい」と「内容」を『幼児の発達の側面からまとめたもの』が五つの領域である。

「環境」の二重構造の混乱は、この「領域」を、保育内容としてとらえてしまう誤用からくるものである。『保育全体が「環境」を通して行うものでありながら、その五つの内容のうちの一つにも「環境」がある』、『外側にあり内側にある』ということなのである。上記『発達の側面からまとめたもの』は、内容を直接指すものではなく、まとめた上で、このねらいや内容が達成されているかどうかを見る『視点』である。保育内容のテキス

トⁱの中には、「保育を見つめる窓」という表現も見うけられ、学生にとってはこうした表現がとても馴染みやすく感じる。子ども主体の遊びを中心とする総合的な活動を展開している保育活動、幼児の姿を省察する、あるいは評価する視点として、「領域」が設定されていると理解することができる。総合的な指導ができていくかという反省的な問いを、この五つの「領域」によって見直し、保育を組み立て直していくと理解することができるならば、「環境」の二重構造の戸惑いから脱することができ、保育活動・幼児の経験のバランスがとれているか、保育者による配慮に欠けたところがないか、より適切な環境はどういうものなのか、創意工夫し、試行錯誤を繰り返していく、保育の質向上の循環が生まれることにつながる。保育者養成において、その初年次に、この「環境」の二重構造についての解説を丁寧に進めていくことに、意義があると考え次第である。

ⁱ 萌文書林 『体験する・調べる・考える領域「環境」』 田宮縁